

Opportunity

いい機会

作詞作曲 マイク・バス



この間の夜、鳥が窓の向こうを通り過ぎた。
鳥じゃなければ、何か飛んでいる生き物だった。
でも正直に言うと、どこへ向かって飛んでいたかは分からない。
ひよっとすると、ネバーランドか、バミューダか、動物園かな。
そして、窓に止まっておしゃべりし始めた。
「僕の友達の、パンダと猿に会いに行こうか？」と言った。
僕はこう自分に問いかけたんだ。「これは何？僕たちはどこにいるの？」
全てのことは分かりにくいけど、少なくともおもしろい。

これは僕の一番好きな夢。
すみませんが、この夢のこと、どう思いますか？
簡単ですよ。やってみて。
僕にお礼を言わなくてもいいから。

それで、飛んでいるうちに、ついに気がついた。
まだこの生き物の名前も種類も聞いていない。
僕に分かっていたことは、翼があって、それが青いということだけだ。
そこでやっと「すみませんが、みんなに何と呼ばれているの？」と聞いた。
「あっ、どうぞよろしく。俺は『いい機会』と言うんだ。
夢を失った人を助けるのが俺の仕事だよ。
数学でも理科でも、君が勉強するのを助けることができるのさ。
どんな教科でも、俺に言ってくれたら、どこまで行けるかを教えてあげよう。」と返事してくれた。

僕は「本当に？」と言うと、
「ああ、そうとも。でも君自身でそれを望まなくてはいけないよ。
それは、勝手に向こうからやってこないんだ。
大変だけれど、価値があるよ。」と言った。

君には学ばなければならないことがたくさん残っているけれど、
自分の中にある情熱の火を燃えさせておくこと、覚えておいて。
僕の夢がどこまでいけるかを見るつもりだ。

君はどう？
君はどう？

家に帰る途中で、下をのぞくと、スイミングプールが見えた。
田園が広がっていて、しかも放課後にテニスをしている子どももいる。
それと、誰かがスープとシリアルを食べているのさえも見えた。
「これはなんてすごい世界なんだ！」といい機会の方を見て言った。

「どういたしまして。
おつりは取っておいていいから（お礼はいらないから）。」といい機会が言った。
「僕の将来はいつ来るの？
どれだけ待たなければならないの？」と僕が聞いた。
「おまえの将来はいつもここにあるさ。ただ自分の心の声を聞いて。俺も聞いておくから。」と答えてくれた。